

第1章 命の限界を探って

私がまだ幼い子どもで、医学の道を志そうなどとは考えてもいなかったころ、医学的知識の仕入れ先と言えばただ一つ、それは居間に置かれたテレビだった。『マッシュ』『セント・エルスホエア』『天才少年ドギー・ハウザー』『シカゴ・ホープ』『ER緊急救命室』といったテレビドラマは、まだ遺体を解剖したこともなければ心音を聴いたこともない当時の私に、医師とはどのような人なのかを教えてくれた。どんな時でも決然としていて、迷いがなく、瞬時に判断が下せて、失敗とは無縁の人——それが医師だった。

テレビドラマはまた、死にそうな人を生き返らせる方法も教えてくれた。それは八歳の子どもにも理解できる明快なものだった。テレビドラマの蘇生法は、お決まりの筋書きどおりに進む。そしてその筋書きには絶対に外せないポイントがいくつかあった。

まず、誰かの心臓が止まる。そろそろ危なくなってくると、たいてい、ぜいぜい喘ぐ、息を詰まら

せる、白目を剥く、胸を掻きむしるといった、誰にでもそれとわかる予兆が現れる。

すると間髪をいれず、近くにいる人たちが全員、倒れた人のもとに駆け寄ってくる。その中から救助者役を買って出た一人が、倒れた人の胸に両手を当てて、勇ましく体を上下に弾ませる。それとほぼ同時に、もう一人の救助者——きまって背の高いイケメン医師——が現れて、自らの口を使ってキスのような奇妙なことを始める。これは、まだ中学生にもなっていない少年には刺激的なシーンであり、とくに相手が女性の場合にはすっかり心を奪われて見入ったものだ。

最後に、それがレベルの高いドラマであれば、誰かが一対のパドルのようなものを出してきて、倒れている人の胸に当てて「離れてください！」と叫ぶ（いつのころからかは私は、大声でこの呪文を唱えると、死にかけた人の心臓に何か重要な電氣的効果もたらされるのだという揺るぎない確信を持つようになった。ある朝、可愛がっていたハムスターが死んでいるのを見つけた私は、悲嘆に暮れながら、なんとかフランクキーを生き返らせようと、そのかたわらに立って何度も「クリア！」と叫んだのをおぼろげに憶えている。けれども、フランクキーはテレビドラマの蘇生ルールには従ってくれず、いつまでたっても死んだままで、頑として生き返ることはなかった）。

「クリア！」のすぐあとにはきまって、その場面にはおよそ似つかわしくないコマーションが入り、それが終わるとふたたび救命処置のまった中に連れ戻される。すると、まるで頃合いを見計らっていたかのように、死にかけていた人が長身イケメン医師からのキスに飽きて目を覚ますのである。やや趣向を変えて、イケメン医師のほうが、まったく反応しない相手へのキスに飽きてしまうこともある。そういう場合、医師は立ち上がって、敵かに何かつぶやいたのち、次なる危機を救うべく、颯爽さつそうとその場を立ち去るのだった。

このようなテレビドラマのおかげで、瀕死の人間に対する蘇生法の効果について、私の頭に強烈な印象が焼き付けられた。まず、蘇生法は効くものだと思えるようになった。必ずではないにせよ、ほぼ必ず効く。だから、いったん死んでしまっても、イケメン医師が近くにいるかぎり、決して死んだままになるようなことはない、と。

それから、蘇生法が効くときは即座に効果を発揮するものだと思えるようになった。察しの良い視聴者なら、キーブラー社のクッキーがどれほど美味しいか教わったり、マクドナルドのビッグマックのコマーシャルソングを歌ったりしている間に、瀕死の人の運命は決まると思うようになるはずだ。これを蘇生の「ビッグマック」ルールと名づけよう。コマーションが終わると、死にかけていた人がすっかり目を覚まして命の恩人と抱き合う。そうならなければ、チャンネルを切り替えてしまえばいい。

というわけで、私はかなり長い間、蘇生ということについて幻想を抱いていたのだった。

奇跡の女の子

それから何年も後のこと。大学から車で帰宅する途中、軽食を取るためにベンシルヴェニア・ターンパイクのサービスエリアに立ち寄った。席に着くと、フライドポテトの油やアイスクリームでべたべたになったテーブルの上に、しわくちゃのローカル紙が置かれていた。私の目は、市の行政の諸問題だの増税と教育予算の削減だのといった記事に囲まれた、ある記事に引きつけられた。

一週間ほど前、ミシェル・ファンクという二歳半の女の子が小川に転落して溺水でんすい。ようやく引き上

げられたものの、溺れてから一時間以上たっており、ミシエルはすでに死亡していた。「ビッグマック」ルールが通用するような生半可なものではなく、本当に死んでいた。間違いなく完全に死んでいた。

ところがその先を読むと、その女の子は生きているという。まだ予断を許さない状況ではあるが、ちゃんと生きているらしい。

なんだった？

私はそのくだりを二度読み返した。ミシエル・ファンクは間違いなく死亡した。しかしその後、息を吹き返し、すでに退院の目途も立っているというのだ。

その後かなりたってから、医学雑誌でこの出来事の全容を知り、私はますます感銘を受けた。^①一九八六年六月十日、ソルトレークシティでのこと。ミシエルは兄と一緒に雪解け水で増水した小川のそばで遊んでいるとき、足を滑らせて小川に転落。自分では妹を救えないと思った兄は、無我夢中で走って母親を呼びに行った。駆けつけた母親は、数分間、死にもの狂いでミシエルを探したが、見つかることができず、結局119番通報した。

それから間もなく救急隊が到着したが、ミシエルを見つけて川岸に引き上げたときには、溺れてからすでに六〇分あまりが経過していた。ミシエルは一時間以上も呼吸をしていなかったわけだ。おそらく心臓が止まってからも同じくらいの時間がたっていたにちがいない。

救急隊員がミシエルを川岸に横たえたとき、ミシエルの体は死んだように冷たくなっていた。この事例を紹介する医学雑誌の記事は、このときのミシエルの状態をそっけない医学用語で次のように記している。「チアノーゼ、呼吸停止、筋肉弛緩、瞳孔の散大と固定、脈拍触知不能」

これは平たく言うと、死んでいるということだ。息をしていない。血液中の酸素が不足して全身が青紫色になっている（チアノーゼ）。そして、瞳孔が開いたままということとは、ミシエルの脳が——とくに、光に対する眼の反応を制御している領域の一つである脳幹が——機能を停止したということだ。

さあ、このときの救急隊員になったつもりで、川岸のミシエルのかたわらに立っていると、想像してほしい。あなたは、この女の子に心肺蘇生を試みるかどうか決断しなくてはならない。あなたならどうするだろうか？

蘇生を断念するだろうか？ 断念したとしても決して不思議ではない。

しかし、こう考えることもできるだろう。この女の子はまだとても若い。成功する可能性はごくわずかであったとしても、二歳の子にはやってみるだけの価値があるのではないか、と。

当時、水面下に一時間以上いて助かった人は、ただの一人もいなかった。一般に、ミシエルのような溺水者が息を吹き返す確率が高いのは、一五分以内に蘇生を試みた場合だとされていた。^②二〇分を超えると、生還できる確率は急激に低下するという。ところが、ミシエルはなんと一時間も水中にいたのである。

そう聞いたら、あなたは諦めるだろうか？

理屈からいえば、諦めて当然である。たいがいの救急隊員は諦めるにちがいない。効果を期待できる理由などどこにもないからだ。試してみるだけ無駄というものだろう。

ところが、その救急隊員たちは、ミシエル・ファンクをなんとか生き返らせようとしたのである。直感なのか、本能なのか、盲目的希望なのか、とにかくなんらかの理由から、ひょっとしたらこの子

を生き返らせることができるかもしれないと考えたのである。

それで、隊員たちはミシエルを救急外来に搬送した。待機していた救急医療チームがミシエルの心拍再開をめざしてただちに奮闘を開始。考えられる限りの手を尽くした。けれども一向に成果は現れず、そのまま一時間が過ぎ、二時間が過ぎ、そして三時間が過ぎようとしていた。

そのとき、ミシエルが、かすかな、気づかないくらいかすかな息をしたのである。やや遅れて心臓も活動の証を示し始めた。といっても、ただ小刻みに震えているだけだった。医学用語で「細動」と呼ばれるもので、ノイズとほとんど変わらない。しかし、それがまもなく規則的な拍動へと変わり、やがて、自発的に正常なリズムを刻むようになった。これは紛れもなく「生きている」ということだ。ミシエル・ファンクは三時間にも及ぶ「死んだ」状態を経て、ふたたび「生きている」状態に戻ったのである。

後に、権威ある医学雑誌『アメリカ医師会雑誌』がミシエルの事例を紹介した際に、その記事に添えられた論説は、ミシエルの生還を「奇跡的」であると評した。^③

主要な医学雑誌のページを繰ってみればわかることだが、「奇跡的」などという言葉はめったに使われるものではない。

ミシエルの新聞記事を読んでいたく感銘を受けた私は、ペンシルヴェニア・ターンパイクのサービスエリアのテーブルで救急科専門医になることを決意した。ミシエルのような人を生き返らせたい。そして、記録をどこまで伸ばせるか挑戦してみたい。三時間が可能なのならば、一二時間ではどうか？ 一日だったなら？ 一か月だったなら？

自宅まで車を走らせる六時間のあいだ、私はずっとミシエルのことを考え続けていた。彼女がその

後どうなったか、いつの日にか必ず突きとめよう。

それから二〇年の歳月が流れ、私はついに彼女の消息をつかむことができた。それは、ミシエル・ファンクのような人の命を救う最先端の蘇生法の意義について、私なりの結論を下すのに十分なものだった。

厳しい現実

初めてミシエルのエピソードを読んだとき、まるで映画のように単純明快なストーリーだと感じた。いったん命を落とした幼い女の子がふたたび息を吹き返す。まことに祝福すべきことであり、あの論説が彼女の生還を「奇跡的」とたたえたのは至極もっともなことだと思った。

ところが、その数年後、医学部在学中に私はある患者さんと出会い、そのようなハッピーエンドはむしろ稀なケースであることを思い知らされたのだった。

ジョーは、医学生として私が初めて担当した患者さんの一人で、とても気さくな男性だった。長年勤めていた製鋼所を退職したジョーにとって、何よりの楽しみはバス釣りで、少しでも興味を示す相手には、嬉しそうに自分が釣った魚の写真集を見せてくれた。

ジョーは、左冠動脈主幹部という、心臓の大部分に血液を供給している重要な血管がほぼ完全に詰まった状態で入院してきた。その部分に閉塞があることは、その日の朝の心臓カテーテル検査で発見されていた。私がジョーに会ったとき、彼は午後に行なわれる手術を待っているところだった。血管の閉塞はきわめて重篤で、体をほんの少し動かしただけでも心臓が完全に止まってしまうほど深刻な

ものであることがわかっていた。

病室を訪ねた私に、ジョーはバス釣りの秘訣を教えてくれた。物音を立てちゃいかんよ。そっと近づくんだけ。とくに大きいやつの場合は気をつけないといかん。目はまったく見えないのに、音には敏感だからな。

ジョーはベッドにもたれ、私はそばにある椅子の肘かけに浅く腰かけていた。釣りの話は適当に聞き流していた。というのは、膝の上のカルテに気をとられていたからだ。私の目はずっと心臓カテテル検査の結果を追っていた。

そのうちにジョーが何もしゃべらなくなったことに気づいたが、音を立てるべからずという釣りの秘訣を実践しているんだな、くらいにしか思っていなかった。釣りの名人はいかにしてバスに悟れずに近づくか。なんだか微笑ましくなって、私は顔を上げた。

すると、私の目にとびこんできたジョーは、目の前の人の額に蜘蛛^{くも}が張り付いているのを見つけたときのごとく、ギョッとして魂が抜けたような表情で私を凝視していた。次の瞬間、ジョーは白目をむいて二〜三回苦しうに息をした。それからまったく動かなくなってしまった。

日頃の訓練の賜物なのか、私はまず脈拍のチェックを行なった。それから廊下に飛び出して看護師に院内救急コール——心停止した患者の蘇生処置に駆けつけるよう病院中の医師・看護師に緊急招集をかけること——を頼んだ。その間に、もう一人の看護師と私とでCPR（心肺蘇生）を開始した。

一分が経過した。そして二分が経過。未だかつて経験したことがないほど長い二分だった。

ようやく救急蘇生チームが到着したので、私は補助役にまわり、ジョーについて知っていることや、左冠動脈主幹部の閉塞のことを医師に伝えた。救急蘇生チームはただちに除細動と薬剤投与を開始し

た。

それからおよそ一五分後、心臓のリズムが回復した。そのときにはすでに気管内チューブが挿入されて人工呼吸が行なわれていた。心拍数にも血圧にも問題なし。

しかし心電図の波形は、閉塞が広範囲に及んでいて、非常に危険な状態であることを示していた。医師がジョーの担当の心臓外科医に電話したところ、ただちにジョーを手術室に運んで手術を行なう必要があるとの判断が下った。

こうして一団が慌ただしく出て行ったあと、病室には空っぽになったベッドと、手垢がつくほど読み込まれた釣り雑誌の山だけが残されていた。

ジョーは、なんとか無事に手術を乗り切ったものの、二度とふたたび目を覚ますことはなかった。心臓の損傷があまりにも大きくて、血液をうまく送り出せなくなり、その結果、心臓以外の臓器も、ジョーの口癖のように「こっぴどくやられる」はめになったのだ。肝臓や腎臓も機能が大幅に低下してしまった。さらに、心臓のリズムが回復するまでのあの長い一五分間に、酸素が十分に届かなかったせいで、脳も重大な損傷を被ったようだった。

私は毎日、ICU（集中治療室）にジョーを訪ねた。カルテに目を通し、検査結果を確認し、そしてジョーの顔をじっと見つめた。

毎日、ジョーの家族とも顔を合わせた。奥さんと成人した三人の子どもと六人の孫が入れ替わり立ち替わり病室を訪れ、涙に暮れながら医師と言葉を交わしていた。良い知らせに大喜びしては、翌日また落ち込む。そんなことが一八日間続いた。

その一八日間のあいだ、私は来る日も来る日も考え続けた。もしあのとき、すぐに廊下に飛び出し

て院内救急コールをし、ただちにCPRを始めていたら、こんなことにはならなかったのではないかとしかに私は、教科書通りにやるべきことはすべてやった。生真面目なボーイスカウト団員みたいになれるけど、私のせいで、ジョーとその家族は医療地獄にはまり込んで抜け出せなくなっているのではないか。

一九日目に訪ねてみると、ジョーのいたベッドには若い女性患者が寝ていた。オートバイ事故で九死に一生を得た患者さんだった。

聞くところによると、前日の晩に医師たちが家族に対し、ジョーにはこれ以上打つ手がないことを告げたらしい。家族は悲しみに暮れた。しかし、どこかほっとする気持ちもあったのではないだろうか。人工呼吸器を外すことに同意したのだった。自力では呼吸できないジョーは、それから間もなく息を引き取った。

ティートーノスの苦難

ジョーのことがあって以来、私の医師としての進路選択に少々ぶれが生じた。いや、少々どころではない。医学部入学当初は救命救急の現場で働くことを夢見ていたのに、現在の私はホスピスの医師をしているのだから。言ってみれば、クォーターバックとしてフィラデルフィア・イーグルスの入団テストを受けながら、結局、審判員をやっているようなものだ。いずれにしても、まったく別種の仕事である。

少なくとも週に一度は、ミシェルやジョーのことを思い出すような患者さんに出会う。

ミシェルのような、嬉しい奇跡に遭遇することもある。蘇生科学の進歩のおかげで、その後何年も元気に生きられる時間を与えられた人たちだ。そういう患者さんに出会うたびに、私は蘇生科学の力に感銘を受け、今後の可能性に思いを馳せる。五年後、一〇年後に、蘇生科学は私たちにどんな恩恵を与えてくれるだろうか。また、ミシェルの奇跡の生還は、生命の保存という、大きな可能性の一端を垣間見させてくれるものではないかと思ったりもする。

その一方で、ジョーのような患者さんに出会う日もある。やはり蘇生科学の進歩のおかげで、何週間も何か月もICUの中で生かされてしまっている人たちだ。そういう患者さんに出会うたびに私は、可能性の限界を押し広げるためにそこまでやる必要があるのかと問わずにはいられない。ひょっとしたら「ビッグマック」ルールに従うべきなのではないか。さくっと簡単に生き返らないのであれば、それ以上余計なこととはしないでいいのではないかと。

何よりも気掛かりなのは、テクノロジーが私たちの死に方をどのように変えるのか、という点である。ホスピスの医師をしていてわかったことが一つあるとすれば、それは、人間は誰でもみな死ぬ、ということだからだ。たしかに、蘇生科学の力によって、死を、何分か、何時間か——人によってはミシェルのように何十年も——遅らせることはできるだろう。しかし、それでもやはり、死は私たち全員に訪れる。

蘇生科学はミシェルのような人たちを救ってくれるが、それには必ず代償が付きまとう。その代償とはいったいどのようなものなのか？ ミシェルの事例はすでに神話めいたエピソードとして語られているので、この問いに対する答えも神話の中に求めるのがよいだろう。

ギリシャ神話に登場するティートーノスという美貌の若者は、命に限りのある人間の身でありなが

ら、曙の女神エーオースと恋仲になる。男としてはそれでも十分に幸せのはずだ、とあなたは思うのではないか。それ以上のことを求めるやつなどいるわけがない、と。

ところが、ティートーノスはそれ以上のことを求めたのである。求めたのはむしろエーオースのほうだったという説もある。とにかく、二人のうちのどちらかがゼウスに、永遠に一緒にいられるようにティートーノスに永遠の命を授けてください、とお願ひしたのである。

問題は、二人のうちのいずれも、永遠の若さをお願ひしようとは考えなかったことだ（それが重大な過ちであったことが後に判明するのだが）。そしてゼウスも、ギリシャの神々がよくやるように含み笑いを浮かべながら、若さの件にはまったく触れなかった。

オリンポス山に響きわたる、野太い、しわがれた笑い声が聞こえるようだ。「永遠の命が欲しいだ」と？ それだけでいいのか？ よしわかった。もちろんやるとも」

ゼウスは約束どおり、ティートーノスを不死の身にしてやった。そこまではよかった。

ティートーノスは死ぬことができないにもかかわらず、時とともに老いていった。しだいに衰弱していき、やがて体も動かせないほどに老いさらばえる。とうとうエーオースのお荷物となった彼を、エーオースは密室に閉じ込めてしまう。

忌まわしき老いが彼を徹底的に打ちのめし、身体を動かすことも手足を上げることもできなくなったとき、エーオースにとってはこれが最も賢明な選択に思われた。ティートーノスを小部屋に閉じ込めて、きらめく扉を封じてしまったのである。弱々しい声だけがいつまでも漏れ続けたが、かつて彼の四肢にみなぎっていた力はもうどこにも残っていないかった。

救命のテクノロジーによって、ジョーのような患者を、少なくとも短期間生きながらえさせることは可能だ。しかし、若返らせて健康にすることはできない。また、老化に伴って起きてくるさまざまな病気を治すこともできない。となると、多くの疑問が残される。

命の限界に挑んだら、どんなことが起こるのだろうか？ 奇跡がもたらされるのだろうか？ それとも、今も天上のどこかにいるゼウスが、人間どもは一向に懲りる様子がないと呆れ果てるのだろうか？

ジョーやミシエルのようなケースは、もともと成功する見込みは薄いことから、とにかく蘇生処置を試みるべきなのだろうか？ 蘇生に成功したら、患者自身は心から喜んでくれるのだろうか？

蘇生ということが、これほど安易にとらえられているのはなぜなのか？ どうして私たちは、とにかく無条件で蘇生の努力をすべきだと信じて疑わないのか？

私たちにはどんな未来が待ち受けているのだろうか？ 喜びに沸くことになるのか、不安におののくことになるのか、それともその両方なのか？

こうした問いに答えるのは容易ではないし、単純に割り切れる答えが見つかるものでもない。したがって、本書を自己啓発書だと思わないでいただきたい。セックスやスピリチュアリティといった自己啓発書の棚でたまたま見つけたのならば、読まなくていい。

こうした難しい問いの答えを探して、私は旅に出た。本書は、その驚きと感動に満ちた旅の記録なのである。

本書には、鼻の奥を冷やすことで脳を保護しようとする装置や、一九七〇年代に流行ったマッサー

ジ機内蔵のベッドのように、体を振わせて血液を循環させようとするベッドも登場する。また、電気ショックを与えて心臓を生き返らせる装置や、ひょっとすると人間を人工冬眠の状態に誘導できるかもしれない薬も登場する。

このような発明を支えている人物にも焦点を当てる。人間が冬眠の仕方を学ぶのであれば師匠はこいつだと信じて、キツネザルという小さな毛むくじやらの霊長類の研究を続けている科学者にも会いに行く。人間の頭部を切断して凍結保存し、一〇〇〇年後に解凍しようと目論んでいる人物にも話を聞く。また、ロックバンド「ジャーニー」のコピーバンドのドラマーで、子どもたちにCPR（心肺蘇生法）を教えている男性も紹介する。

蘇生科学の恩恵を受けている方々にも登場してもらおう。心臓が止まるたびに自動的に作動する装置のおかげで命拾いしている男性。九歳の兄の勇気ある行動のおかげで命を救われた二歳の女の子。そして、脳を冷却することで大手術を乗り切ったキノコ農場の作業員。

こうした蘇生科学の負の側面にも目を向ける。その一例として、ある老女が心肺蘇生を受けずに「自然」死したことが、全国規模の騒動にまで発展したケースを取り上げる。また、いかなる場合にも蘇生処置を施すことが本当に正しいのか否か、日々問い続けている救急隊員にも登場してもらおう。さらに、夫の命を救うべく最善を尽くせなかったことで自分を責め続けている女性にも話を聞く。

死んだ人を生き返らせたいという切なる願いを叶えてくれる科学の力は本当にすばらしい。しかしその一方で、私たちは莫大な代償——金銭的、倫理的、精神的代償——を払わされることになりかねない。革新的な技術が次から次へと生み出されてくるので、こうした代償もどんどん膨れ上がっていく。したがって、どんな場合に、どんな方法で、蘇生科学の力を利用して命を復活させるべきなのか

を、私たち一人一人がしっかりと考えておく必要がある。

蘇生科学を受け入れて積極的に利用すべきなのか？ 蘇生科学の力を使って自分や家族を生き返らせるべきなのか？ それとも、そのようなことはやめておくべきなのか？ そう問われても私には答えることができない。私にできるのはただ、生と死の境界を曖昧にしつつあるこうしたテクノロジーの進歩について、誰もが避けては通れない問題を提示することだけである。

本書では、明るい未来の展望を描くと同時に、いずれ私たち全員が選択を迫られることになる諸々の課題について述べていこうと思う。